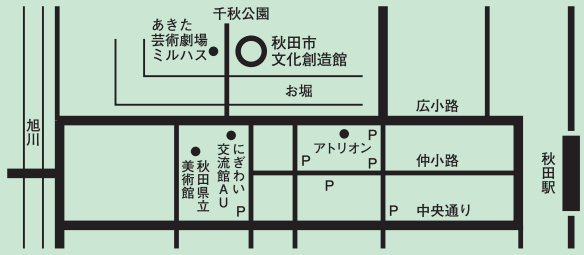
秋田　市　文化　創造　館
AKITA　CITY　CULTURAL　CREATION　CENTER

〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町 3-16
開館時間 9:00–21:00
休館日・火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）
・12月29日–1月3日
お問合せ Tel: 018-893-5656　Fax: 018-893-5659　e-mail: info@akitacc.jp
公式ウェブサイト https://akitacc.jp

そう SO　する？ SURU?

5号　2023年10月



●アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

カスカ、トゥバ、キメラ

「アニマルズ、ヒューマンズ、アスレチック」

8月19日（土）当館スタジオBで開催されたトーク&ワークショップ「アニマルズ、ヒューマンズ、アスレチック」。登壇者の山口未花子さんは、アメリカアラスカ州の隣に位置するカナダのユーコン準州の先住民カスカ、内陸トリンギッドから学んでいる人類学者です。狩猟、儀礼、音楽、踊り、衣装などの事例を挙げ、人々と動物の関わり、自らも実践する狩猟について話しました。一方、美術家である山川冬樹さんは、モンゴルの北西に接するロシア連邦トゥバ共和国の遊牧民より、ホーメイという歌唱法を学びました。この日もホーメイを披露。またハンセン病回復者であった政石蒙（まさいしもう）さんの歌文集『花までの距離』を引き、戦後強制抑留されていたモンゴルで、ハンセン病であることから収容所内で二重に隔離されるという極限的な孤独の中、動物たちや花々と政石さんとの間に生じた、想像的な交感について語りました。石倉敏明さんは芸術人類学と神話学の専門家。いくつもの動物の特徴が混ざり合った「キメラ」を表した世界各国に散らばる芸術作品や、東北地方の「しし踊り」などを紹介しながら、「共異体」という言葉を用い、異なるもの同士が異なったまま共存するという社会のあり方にまで言及。各レクチャー、鼎談と続いた3人の充実のお話、後半の、観客を交えた質疑応答の部分をレポートします。

山口未花子
山川冬樹
石倉敏明





Q1

人間は古来より動物を崇め、狩猟し、家畜として飼い、そして今の私たちには〝ペット〟という存在があります。そのお話をうかがいたいです。

山口　子どもの頃、たくさん動物を飼っていました。京都の田舎のほうで暮らしていて、広い庭があり、ヒヨコ、ウズラ、ウサギ、イヌ、ヤギまでいたんです。近所の人も見に来るくらい。お年玉で買い集めて、世話をするのも苦でなかった。でも中学から埼玉の「自由の森学園」という学校に入り、寮生活をしている間に、動物が次々と死んでしまって。それにショックを受けて、人間が動物を飼うことは動物に悪いことだと思うようになり、飼うことが怖くなりました。
一方で「自由の森学園」は森の中にあったので、野生動物を観察するということを、生物の先生と一緒に始めたのですが、それが楽しくて。私は、動物が本来の状態でいられる場所にこちらから赴いて、関わるほうがいい。それが高じて、今狩猟をしているのかもしれません。だから飼ってかわいがるよりも、狩猟をして動物を獲るほうが、納得できる関係です。

石倉　小学生のときに飼育係になって、ニワトリを育てました。小屋のニワトリには餌をあげるのに、給食の鶏肉は食べている。これをどう理解していいのか分からなくて、先生に聞いても、うまく答えてくれなかった。日本の教育はそんなふうにペット（愛玩動物）と食肉を分断し、その中に生きる「動物のいのち」を扱いかねています。人間というのは、目的に応じて、動物を家畜として食べたり、所有したり、あるいは家族やパートナーとして一緒に生きる。最近の人類学は、人間について研究するだけではなくて、そうした動物と人間の関係を見ていく、そこに、人間性が表れると。
インドのダージリンでフィールドワークをしたときに、「生き神様」と半年間一緒に暮らしました。チベット仏教では「活仏」、ヒンドゥー教では「クリシュナ神の転生した聖者」という二つの信仰を背負った聖者です。その家が動物王国のように、いろいろな動物を飼っていて。ダージリンでは、ペットを飼っている家は稀でしたが、その家だけはなぜか一緒に生きるためにたくさんの動植物を育てている。ペットとして育てるというよりも、ただ生きることを許容する空間があって、半ば公園化していました。人類学や哲学の概念だと「コンパニオン・スピーシーズ」や「コンパニオン・アニマル」という言い方をします。「仲間としての生物」という意味です。

やまぐち・みかこ
北海道大学文学研究院准教授。専門は人類学。2005年よりカナダ・ユーコン準州において先住民カスカの古老から狩猟採集を学ぶほか、内陸トリンギットの動物描写、西表島のイノシシ猟などについても研究。現在は北海道で自ら狩猟を実践し、獲れた動物の毛や皮を使った工芸品の製作なども手掛けている。著書に『ヘラジカの贈り物』（春風社）、共著に『生きる智慧はフィールドで学んだ』（ナカニシヤ出版）など。

Q2

先ほど山川さんが、インコの鳴き声とセッションしたというお話をされていました。小学生のときに飼っていた金魚が水面にぷかぷか浮いていて、今考えると酸素が足りないのですが、おばあちゃんは、父親が前を通ったときだけだと。餌をくれる父になついてぱくぱくしてる。小学生ながらに、あり得ないだろうと。金魚は脳みそがちっちゃいから。でも、おばあちゃんは金魚とコミュニケーションがとれていたのかも。このあたりまでがコミュニケーションをとれる生物の限界だなというラインをお聞きしたいです。

山川　先日たまたまYouTubeで見た動画を思い出しました。スッポンにはとにかく噛みつくイメージがありますが、実は結構人になついて、餌をねだることもあるらしく、びっくりしました。ご質問への答えですが、やはり僕は歌を歌うので、肺呼吸をするかどうかがラインになりますね（笑）。鳥類は「鳴管」という哺乳類の「声帯」とは異なる発声器官を持っているのですが、肺呼吸さえしていればオッケーです。でもそういえば秋美のアーツ&ルーツ専攻には唐澤太輔さんという、「粘菌」の専門家の先生がいらして、唐澤先生は日々粘菌とコミュニケーションされているので、ぜひお話をうかがってみたいですね。世の中には肺魚という肺呼吸する珍しい魚もいるし。とすると肺魚ともコミュニケーションできるんだろうか。

石倉　僕は親しくするのも好きですが、冷たくされるの、好きなんです。こちらは愛情を持っているのに、どこか通じてないな、というところに、もえてしまう。種というよりは個体なんじゃないかな。子供の頃に知人から「ミニウサギ」をもらってベランダで飼い始めたら、どんどん大きくなって、12年間生きて、巨大なウサギになったその子はツンデレでした。かわいがろうとすると逃げるんだけど、フルートを吹いたり、ベースやギターを弾くと、耳をピッて立てて、聞いてくれる。つながっている、でも触れない。僕好みの身悶え感をかなえてくれたのは、そのウサギだけでしたね。あとカメも好きでした。



やまかわ・ふゆき
美術家、ホーメイ歌手、秋田公立美術大学准教授。自らの声・身体を媒体に、音楽／現代美術／舞台芸術の境界を超えて活動。南シベリアの伝統歌唱「ホーメイ」の公演を16カ国で行う。現代美術の分野では、「パ」という音節の所有権を一人のアートコレクターに100万円で販売することで成立するパフォーマンス『「パ」日誌メント』（2011～現在）などを発表。ハンセン病療養所（瀬戸内国際芸術祭／大島青松園）や帰還困難区域（Don't Follow The Wind展／グランギニョル未来のメンバーとして）での長期的な取り組みもある。

山川　やはり異種間で音楽のようなセッションが成立したら嬉しいですよね。でも向こうは人間とは異なる感覚で生きている。動物たちとの間に音楽的なコミュニケーションが成立したとして、それを向こうも僕らが言う〝音楽〟とは思ってはいないと思うんです。でもそのズレこそが重要な気がしていて、人間とは何かを考えるきっかけになる。共鳴できたことを素直に喜びつつ、同時にそこにあるズレから、こちらにはわからない彼らの世界に何があるのかを想像したい。

Q3

狩猟免許を持っています。山口先生にお聞きしたいのですが、動物を殺して食べることをどう考えていらっしゃるのか。私、動物をあやめることに抵抗があって。肉を食べることはできます。実猟講習会でキツネが前を走っていたとき、先輩がミスをして、撃てなかった。きれいなキツネが殺されなくてよかったって安堵してしまったんです。

山口　カナダで調査した経験から実感しているのは、「殺すチャンスをもらえることは喜び」、逆に動物がやって来て贈り物を自ら差し出しているのに、受け取らないのは失礼だということです。例えば「キャッチ・アンド・リリース」は、プレゼントをもらったけれど、いらないって言って戻すようなことで、むしろ魚に対して失礼な行為にあたるというわけです。
とはいえ私自身、一人で日本の森の中で動物を殺すことになったら、つらいと思うのかもしれないと思ってました。私の初めての獲物は、罠にかかったイノシシでしたが、かかった瞬間感じたのはとにかく嬉しいという気持ちでした。1週間試行錯誤して、やっとかかったイノシシです。すぐに殺して、解体してあげないと、という感覚が強く、センチメンタルな感情が湧き起こる余地などなかった。私は時々学生を連れて狩猟をし、免許を持っている学生には「止め刺し」をさせますが、殺せる学生と、殺せない学生が半々で、しかも事前に自分は殺すのが平気かどうかという予想と必ずしも合致しないんです。
動物の気持ちになって、山を巡り、罠をかけて、やっと見つけて獲れた喜びは、動物に認められた喜びだし、そのあとには肉を解体しながらこの部位はこういうふうに食べたらおいしいなとか、あの人にあげると約束していたなと考える喜びもあります。







いしくら・としあき
芸術人類学者、神話学者、秋田公立美術大学准教授。1997年よりダージリン、シッキム、カトマンドゥ、東北日本各地で聖者や女神信仰、「山の神」神話調査を行う。近年は秋田を拠点に、北東北の文化的ルーツに根ざした芸術表現の可能性を研究。著書に『Lexicon 現代人類学』（共著・以文社）、『野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅』（共著・淡交社）、『人と動物の人類学』（共著・春風社）、『タイ・レイ・タイ・リオ紬記』（高木正勝CD附属神話集・エピファニーワークス）など。



『〜になるためのトライアル／Trial:to become a *****』
2023年、秋田市文化創造館では「〜になる」をテーマに、さまざまなトライアルに取り組んでいます。このイベントでは、試みの例となるユニークな活動を行うお三方を招き、「人間以外の種と交わりながら生きる術」そして「身体を使って表現をする術」についてお話いただきました。人間のために整えられた社会の中で薄まってしまった人間の能力、あり得たかもしれない人間のかたちを見つめ、「〜になる」を自由に発想してみましょう。

Trial : to become a *****

トーク&ワークショップ「アニマルズ、ヒューマンズ、アスレチック」

日時：2023年8月19日（土）
会場：当館スタジオB、
zoomウェビナーによるオンライン配信あり
主催：秋田市文化創造館

トーク全編のレポートはこちらから

別の言葉になる予感

12月の『あときとた』という文化創造館での発表に向けて通っては制作に勤しんでいます。勤しむ、と言っても街を歩いたり何か伝統的なものを見に行ったり喫茶店に入ったり人と話したり空を見たり絵を描いたりスペースや川沿いで踊ったり言葉を考えたりカメラで撮影したりチームで打ち合わせをしています。

『あときとた』というタイトルは秋田をひらがなにそれぞれ分解した状態でこれから別の言葉になる予感みたいなのがあるから、それを含めて持ってきて集まろう、これを発表として行いたいと思っています。

こないだ美術人類学者の石倉敏明さんが創造館で話されていたキメラ合体みたいなことが出来ないかというイメージがあります。僕が小さかった時、なんでもかんでも合体させて遊んでいた記憶があります。そのアクロバティックな合体を想像しては興奮して、興奮した身体は踊りとも叫びともお漏らしともえも言われぬ状態を喜びをもって身体に潜えます。大人になると様々なことが離れ離れで、社会も離れ離れで存在しているようで決して向こうと繋がらないようなことが先回り的に想像されて何か頑張れなくなってしまいます。もしくっつけられると思えたらあの時の身体のように興奮が漏れ出てお漏らしを我慢するようにくっつけようと近づく運動が起きないだろうかと思うんです。

創造館のあの広い真っ白や庭と館内を繋ぐ凸凹としたアドベンチャー空間と広がる池でそれに挑戦します。

根子番楽は小学校の設えの中でパイプ椅子と畳が敷かれ、壁にはかつての子供達の描いた版画や村人のポートレイト、ずっと使われてきた道具をそのまま展開するような形が空間ごとを包んでいる。

西馬音内盆踊りを見にいくことはいくつかの川を越えて、村の暖簾のような題字を潜り抜けて入っていく仮想的な世界のようにも思えたのは霧がかっていたのもあろう、長い道路を無数の踊り手がぐるぐると顔を隠し目の前でそれぞれを比較するようにパラパラと変わる代わる観客の目を触っていく。

入道崎を訪れた際、急な崖から繋がり打ち付ける波の日本海があって、ダンサーとしては思わずここ秋田出身の舞踏の土方巽さんの身体のことが想像された。入道崎を上空から捉えた画像をネットでまず見てみると真っ先に出てきたエメラルドグリーンが周辺を覆い、灰色の岩が粉々に飛び散り、島の端部分を構成していき内側には穏やかな緑が気持ちよさそうにふさふさと。この画像はきっと夏のもので、3月に見たのは前方に向かうにもまだ風が強く、荷物は重石を置かないと飛ばされそうな危険があり、その危険性こそが人の強い力を引き出すようなことを思って、それで土方さんの身体を簡単に思い浮かべた。

文：Aokid



あおきっど
1988年生、東京都出身。ブレイクダンスをルーツに持ち美術大学で映画を専攻。在学中より舞台芸術や美術作品の制作を開始。展示や上演だけでなく、街中や広々とした公園などでパフォーマンス、ゲリライベントを企画。さまざまな分野のアーティストや別分野の人を巻き込みながら、もう一度自分たちの場所として街にられる方法などを模索する。

Aokidさんについて詳細はこちら







プロジェクト期間：2023年8月～12月
ワークショップ、ショーケース（成果発表）：10月23日～29日
公演：12月23日～24日
展示：12月下旬

申し込みはこちら

※Aokidさんのプロジェクト「あときとた」は、当館の創造実験事業「～になるためのトライアル」の一環です。8月にリサーチと交流会が始まり、12月の公演に向けて進行。9月には自身の活動を紹介するレクチャー・パフォーマンス、10月のワークショップでは作品の素材となるものを創作。11月から稽古が始まり、12月の公演を目指します。
Aokidさんと共に身体を動かし、街に溢れるさまざまな偶然と出会い直すことで、新しい身体の使い方・街での過ごし方を見つけてみませんか。ご参加をお待ちしております。

PARK | いきるとつくるのにわ

観察する
出会う
育む——秋田で暮らす人々が手を動かしつくることを実践する場
残す

『PARK | いきるとつくるのにわ』
秋田に暮らす人々やクリエイター、専門家が交わり多様な活動を展開するプロジェクト「PARK | いきるとつくるのにわ」。「観察する」「出会う」「育む」「残す」の4つのプログラムを通して、秋田の文化的土壌をたがやしていくことを試みています。
「育む」は昨年度、8月から12月まで秋野菜を育てながら、いぶりがっこや干し柿を作りました。2023年の4月から9月は夏野菜を育て、夏野菜の保存食研究会や草木染めを実施しました。参加者の方々とその振り返りをしました。



今度はよもぎをとりにいって、よもぎもちを作るとか。秋田の伝統野菜を使った料理を作るとか。山菜のプロと山に入り見分け方を習うとか。今回、せっかくハーブを育てたけれど生かしきれなかった。化粧水やお茶を作って、育てたものは全部生かしたい。

ガイアガーデンさんでミニトマトが食べられて楽しかった。それと市役所のキッチンの切れない包丁で料理したのもいい思い出です。



畑に行った遠足が楽しかった。日々の暮らしにプラスになるような、仕事以外の会に参加できて嬉しかったです。

創造館に畑が欲しい！市長さんに訴えたいです。



雪室が大変でした。野菜がダメになってしまった。甘みが増すと聞いていたのに。水分量の問題でしょうか。もっと乾燥させた方が良かったのか。雪室に必要だったことをおさらいして、場所を変えてでも今年度リベンジしたい。

地植えと鉢植えの違いの問題はある。塩素が多い水道水で水やりは限界。雨水でないと栄養がいかない部分もある。水道水と、雨水をためたバケツと両方を考えないと。



草木染めが楽しかった。玉ねぎの皮で染めて綺麗な黄色のストールができました。いぶりがっこや干し柿、難儀なところを山本美里さんが影でやってくださって。感謝しています。

参加したのは、開店予定の自分の飲食店の庭で野菜を育てたいという理由でした。暗中模索の中この「PARK」を見つけ、ガイアガーデンさんに野菜の生育の仕方を学べたのが大変ありがたかった。



家庭の知恵を育む

昨年の2022年8月から始まった「育む」は年度末で活動を一度区切りつつ、秋、冬、春、夏と野菜の栽培を通して料理やものづくりを行ってきました。「育む」のプロジェクトメンバーは野菜を自宅で育てている方や、これから育ててみたい方が大半で、主婦や学生、料理人など様々な方に参加していただきました。栽培指導を担当していただいたガイアガーデンの菅原さんにもこぞとばかりに日頃の疑問をぶつけ、プログラムを組んでいる私よりも知識が豊かで、メンバーとはお互いに教え教えられの関係でした。

最初は野菜栽培方法のレクチャーが中心だったミーティングも、メンバー同士でおすすめの調味料や食べ方を紹介し合うようになり、「育む」がお互いの知識共有の場として活用されるようになっていきました。

そんな様子を見て開催したのが、メンバーの一人が講師となった塩こうじ講座です。料理で使う塩の代わりに塩こうじを自作しているメンバーが、塩こうじの作り方と塩こうじ料理をメンバーに紹介してくれました。それぞれの家庭で実践していることでも、他人から見たら当たり前ではないことが多々あります。塩こうじ講座以外にも干し柿作りや草木染めなど、さまざまなミーティングを行なってきました。どの講座でもメンバーの経験や知識がにじみ出ていて、それぞれのメンバーが先生になる瞬間が度々ありました。

振り返れば、メンバーそれぞれの生活の知恵が生かされ、家庭の中に埋没していた知恵の発掘と共有の場が「育む」だったのではないかと思います。「育む」で得た知恵がそれぞれの暮らしで活躍すると思うと嬉しいです。

文：山本美里

雪室勉強会
日時：10月15日（日）、11月11日（土）、12月7日（木）
会場：当館 ほか
登壇者：わいないきょうこ ほか

トークイベント
「この町、シネマ」映画サミット
日時：10月22日（日）14:00–16:30
会場：ヤマキウ南倉庫
登壇者：シネマ・デ・アエル（岩手県宮古市）、御成座（大館市）、アウトクロップ（秋田市）

山のホームセンター
入門編～素材採集の土産～
日時：10月28日（土）14:00–16:00
会場：当館 スタジオA1
登壇者：吉田勝信（デザイナー）、安藤隆一郎（染色作家）

山のホームセンター
実践編～素材採集の土産～
日時：10月29日（日）10:00–13:00（小雨決行）
会場：健康の森
登壇者：安藤隆一郎（染色作家）

「PARK」今後の予定はこちら

やまもと・みさと
神奈川県出身、秋田市在住。「PARK | いきるとつくるのにわ」プログラム・コーディネーター。最近はイラスト、刺繍の制作をしている。器とクリームがのった甘いものが好き。

写真：伊藤靖史（Creative Peg Works）



伊沢正名さんの糞土思想

「もうね、僕の糞土思想は死の世界にまでいっちゃってるんですよ」。そう言ってワハハと笑う伊沢さん。僕が伊沢さんと出会ったのはもうだいぶ前ですが、それから幾度となくウンコの講義（略してウン講義）を拝聴してきました。秋田で久しぶりにお会いした際におっしゃったのが冒頭の一言。

6月18日（日）秋田市文化創造館1階のコミュニティスペースで開催したイベントは、秋田県事業（若者と地域をつなぐプロジェクト事業）「国語・算数・理科・デザイン！」のキープログラムとして企画したもので、約半世紀にもわたり野グソをし続けている伊沢正名さんの執念や観察眼、社会へ向ける眼差しを多くの世代の方々に伝えるのが目的でした。

講義が始まると、「ウンコとは何をもって定義されるのか。ある生き物にとって不要なものがウンコだと言われるが、植物が不要とした酸素を私たちは吸って生きている。逆に私たち動物が不要とした二酸化炭素を、植物は必要としているのだ」さらには、「人間が臭いもの、汚いものとして忌み嫌うウンコを栄養分として必要とする生き物たちがたくさんいる。それをトイレに流すのではなく、野グソをすることによって“命の返し方”を実践している」などとお話しされていました。

自宅の裏山で野グソを経過観察し、いかにしてそれが分解されていくのか、動植物が利活用しているかを記録した鮮明な写真を見せながら、解説していきます。見事なまでに昆虫が食べ、植物の根が集まり、ウンコがあった空間を小動物が棲家にまでしています。それらをもって「人間にできる最も崇高な行為が野グソ」と定義づけます。

講義後は正しい野グソの仕方を披露。穴掘り用のスコップやハッカ水による虫除け、そしてお尻を拭くための葉っぱを机の上に並べていきます。驚くほど表面が滑らかな葉っぱや枯れ葉なのに柔らかいもの、どこにでも生えている雑草など、伊沢さんの葉っぱコレクションを参加者の皆さんが手に取って驚きの声を上げているのが印象的でした。そして伊沢さんは宿泊した秋田駅近くの宿の目の前に大きな桐の木が自生しているのを見るやいなや、「お尻を拭くのに最適な葉っぱの大きさですね」とおっしゃっていました。桐の葉は適度に潤いがありよく活用するとか。

こうして盛況に終えたウン講義ですが、帰る際には「体にガタがきてもうくたばりそうだ」と漏らしていました（以前オンライン会議をした時にも言っていましたが）。かつて舌癌を患い、それを乗り越え改めて生死に向き合い今もなお精力的に糞土思想を伝導する姿はもはや仙人のようです。

1973年、屎尿処理場建設に反対する住民運動に憤りを感じ、1974年、信念の初野グソを放ってから、2024年元旦で50周年を迎える計算になります。正月の挨拶と共に伊沢さんのこれまでの業績を讃える、そんな良い年の迎え方をしたいと思っています。ウンコ知新。

文：柚木恵介

リソ倶楽部体験会

文化創造館で働き始めたのは6月。約2ヶ月間の堕落した生活を終え、仕事のアレやコレを吸収していく毎日だった。

リソ倶楽部の担当になったのは7月の半ば頃。前任の方を引き継ぐ形で取り組むことになった。

当日の申し込みは6名。飛び入りも含めると20名ほどになる瞬間もあった。前日まで1人しか申し込みがなかったので、マンツーマンになる想定もしていたが、ありがたいことにたくさんの方に参加いただいた。

この日は、それぞれが自分の紹介したいことを1ページにまとめ、一冊のZINEを作るという内容。

ZINEを作る作業と、コミュニケーションの相性は意外と良い気がする。原稿を書くときは黙々と行い、たまに何かを考えるように斜め上の方向を見て、また紙に戻る。

誰かがボソッと呟くと、そこからポコポコと会話が生まれる。漫画家の現場ってこんな感じなのかなと思った。

製本後には、今日の感想とこれからのリソ倶楽部についての話をした。

「本の形になると嬉しい」という感想や、「次に買うインクは絶対に青にしましょう」といった要望も受け取った。青の人気がすごい。

次第に会話はリソだけではなく、印刷や本のことに広がっていく。「上小阿仁村では活版印刷のワークショップがあり、過去に参加したことがあるんですよ」。

それぞれの経験や知識を共有し、新しいアイデアや、やってみたいことが生まれていく。

「文化創造館はどんな場所ですか」。入社したときはこの質問に答えられなかった。まだ明確な答えは用意できない。しかし、交流が生まれる最初のフックを作り、いつの間にかそれぞれが新しいフックを見つけて飛びついている。少なくともそんなことができる場所なのではないだろうか。

文：白田佐輔（当館スタッフ）



1㎡で何しよう？

「1㎡で何しよう？プロジェクト」（以下「1㎡プロジェクト」）は秋田市文化創造館のスペースを1㎡だけ借りて私がひっそり行っているものです。

【プロジェクト発足の経緯】 秋田市文化創造館には「平米貸し」という1㎡単位で貸出す独特なシステムがあります。これを知ったとき「マジか。儲からないことをよくやるなあ」と感心するとともに、「きっとこれはどんな小規模利用も受けて立つぜいう市民に向けた文化創造館の挑戦状に違いない。負けてらんない」と奮い立ちました。美術「2」だしズブの素人なのですが、思いついてしまった以上自分でやるしかない、とひとりで始めました。

【展望】 1㎡プロジェクトの最終目標は次の3点です。①多くの方が「自分だったら何しようかな」と考えてこの挑戦状にチャレンジして平米貸しが長く続いていくこと。②プロジェクトを続けていく中で自分に納得できるものを一つですか（秋田弁で完成させるの意）こと。③ゆくゆくはカタルバーのような愛されるプロジェクトになって世界にうって出ること（ウソ）。

【現在】 借りた空間をテープで囲んだだけの第1回からスタートし、その後は主に平日に家にある不要品などを用いてコマ撮りアニメを作ったり雑草を生けたりしています。最初は他の人の反応が怖くてたいへん緊張しましたが、自分以外はあまり気にしてないことがわかり、この頃は自分が楽しければいいと割り切って取り組んでいます。制作がうまくいかない時も、スタッフの方や通りすがりの方とのちょっとした会話から思わぬ反応をもらうこともあり励まされます。この結果、作品はともかくメンタルは鍛えられました。

1㎡プロジェクトはまだまだ続きます。見かけた際には温かく見守っていただき、ひと声かけてくださると嬉しいです。これからもよろしくお願いします。

文：東野和加子



文化創造館の柱の足元に実際の雑草などを生けて街中の電柱の様子を再現。



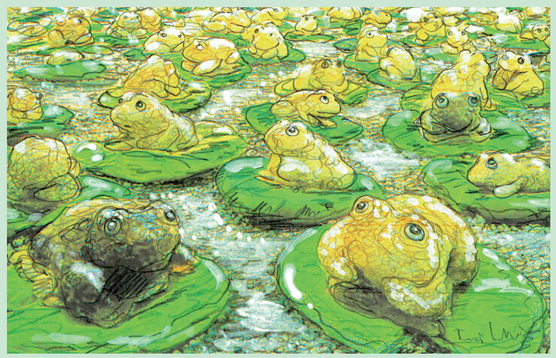
GWに参加した「ゴザ活」にて「沼にハマる」靴のコマ撮りアニメを制作。

ひがしの・わかこ
愛知県出身。主婦。秋田に15年住んでいます。
文化創造館によく出没します。



（左）ゆのき・けいすけ
1978年生。東京芸術大学デザイン科修了。企業デザイナーを経て東京芸術大学、法政大学で教鞭を執り、秋田公立美術大学に赴任。素材実験やプロダクトデザインを研究する傍ら、ワークショップ、アートプロジェクトなど多数企画する。

（右）いざわ・まさな
糞土師。1950年生。1974年野グソ開始。2006年、菌類・陸花植物の写真家を辞め、糞土師としての活動を開始。著書に「くう・ねる・のぐそ 自然に「愛」のお返しを」「「糞土思想」が地球を救う 葉っぱのぐそをはじめよう」（共に山と溪谷社）、「ウンコロジー入門」（偕成社）など。



かえるくんのモヤモヤ

かえるくんはモヤモヤする。無視できない状況と出会った時、流れてくる情報を飲み込めなかった時、友達と意見がぶつかった時、何かわからない違和感を覚え、その正体がなんだかわからない時、モヤモヤする。昔はそのモヤモヤが苦しかったけど、今はモヤモヤに出会うとその正体を突き止めようとその周りをウロウロすることにした。なぜならモヤモヤはイメージの種だと気づいたから。

ある時、かえるくんは「イメージはどこから来るのだろう」とかんがえた。道で見つける？　情報で出会う？　友達から教えてもらう？　ぴったりなイメージに出会うとうれしい。それは幸せなこと。でも出会えない時もある。だから苦しい。イメージはぼんやりとした形を持っている。イメージを確かめたくて、それを形にしようと試みる。ぼそっと言葉にしてみたり、ボソボソ文字にしてみたり、グニューと絵に描いてみたり、ペタペタ形にしてみたり、ふわっと音にしてみたり、クネクネ体を動かしてみたり……でもなんだか違うなと感じ、また何度も繰り返し、ぴったりの形にしようと試みる。その感覚のやり取りの時間がとても貴重で楽しい。でも、イメージの前の状態には形はない。言葉もない。動きもない。何もわからない状態。あれ？　それってもしかして、モヤモヤ？

モヤモヤはもしかして、新しい活動につながるイメージの種？　モヤモヤするのは大切なこと？

何かがわからない、正体がわからない、何かが違うとわかるけど、何が違うかわからない。言葉にできない。だからモヤモヤ。

モヤモヤするのはやめなさい、怒られそう。でもイメージと出会う前にはモヤモヤが必要なのかも。自分をかえる入り口がモヤモヤなのかも。だからモヤモヤと出会ったら覚悟を決めることにした。

モヤモヤを形にするために、その周りでウロウロしながら、ぼそっと、ボソボソ、グニュー、ペタペタ、ふわっと、クネクネやってみる。するとそこから思いもよらぬイメージがにじみ出る。出会ったことがないイメージが見えてくる。するとまた、それをぼそ、ボソ、グニュ、ペタ、ふわ、クネできる。その時間が何よりも大切でうれしい。イメージが生まれる前の大切な種。それがかえるくんのモヤモヤ。

文：かえるくん（館長代理）　絵：一藤浩志

「○HAJIMARU」がオープンしました

小さな物語のような商品を集めているお店です。







写真：高橋希

「○HAJIMARU」の営業日時は水〜日・祝 11:00–18:00。ロゴデザインは当館スタッフでもある牧野心士によるもの。

HAJIMARU

「○HAJIMARU」は、文化創造館の1階に5月にオープンした小さなショップです。手に取ると、ものが生まれた場所の風土や、つくり手の思いが伝わってくる、こだわりの商品を扱うお店が集っています。出店は、民芸パパヤー（食器）、のはらむら（玩具・雑貨）、マザー食堂savu.（食品）、blank+（生活雑貨）、ガイアガーデン（野菜）、お菓子のくらた（和菓子）、佐藤勘六商店（いちじくグッズ）。

「オープンまでのわずかな時間にそれぞれのお店へ行き、商品についてお話をうかがいました。〝ここにある理由〟といえばよいのか、ひとつひとつに物語があり、心地よいバイブレーションが伝わってきます。7月の大雨で、出店者の何名かは被災され、本店舗の休業や収穫の大幅減を余儀なくされました。その場に駆けつけて一緒に泥かきをすることはできませんでしたが、それぞれのお店番をするような気持ちで、お預かりしている商品をここで販売しました。常連のお客様が〝ここで売っていると聞いたから〟と買い物にいらっしゃり、品物と引き換えに、店主の方々への思いやりの言葉をいくつもことづかりました」（店主の前田優子さん）。

ショップ内では7月よりシェア型書店「ひびきあう本棚」もスタート。本棚7つの部屋に割りあてられた「店主」たちが、思い思いのテーマで選書しています。購入することも、カフェテーブルで読むことも可。秋田県立大学副学長・高橋秀晴さんは秋田にゆかりのある文学の本を中心に、「ユカリロ」編集部は自ら発行するリトルプレスや全国のローカルメディアによる出版物を、古本店「乃帆書房」の本棚は毎月選書テーマが変わります。北秋田市阿仁を拠点に活動する「すく」の加藤大雅さんは若手の表現者による本を中心に、大仙市地域おこし協力隊の中山里沙さんの本棚はプライベートな雰囲気です。また、五城目の「ものかたり」は、本を贈りたい相手について書いた手紙を投函すると、かわりに絵本を選んでプレゼントする「おくるポスト」を設置。hanautaさんセレクトのCDも並び、お店のためのプレイリストを聴くこともできます。

「豆腐百景」矢吹史子さんのお話

文化創造館のお豆腐屋さんは、美味しいアイデアの宝庫です。

●看板商品よじろあげ

昨年7月に始めた将軍野店に続き、ここ秋田市文化創造館店を今年4月にオープンしました。油揚げと厚揚げの間のような新食感揚げ「よじろあげ」が看板商品です。店頭で焼いて、湯沢市の石孫本店さんの「みそたまり」に砂糖を加えたタレを塗っていただきます。名前は千秋公園の与次郎稲荷に因んでいます。全体の売り上げの4割は「よじろあげ」、秋田の名物と言われるまでに育てたいと思っています。

●できたてよせ豆腐

量り売りの「よせ豆腐」は店の中で作っています。使用しているのは厳選した強首ファームの大粒大豆「リュウホウ」のみで、父の経営する「臨海食品」に持ち込み、豆乳まで加工してもらいます。美味しく搾れるんですよ。天然のにがりも臨海食品のもの。店頭でふわふわのできたてよせ豆腐をどうぞ。

●素材の良さをどう活かすか

豆腐を使ったメニュー開発に協力してくれる生産者やお店の方々のほとんどは、雑誌「のんびり」やウェブマガジン「なんも大学」の編集者として取材先で出会った方々。開店当初からある「おとうふサンデー」や「抹茶＆しるこ」は角館の「かどや食品」のあんこを使用しています。豆乳ドリンク「鹿角のりんごシロップ」は、「レディースファーム」の農家のお母さんたちが、アップルパイを作ると余るリンゴのシロップをどうしようと言うので、豆乳で割ってみたら美味しくて。「横手の米麹の甘酒」は、「旬菜みそ茶屋くらを」の米麹で自分で作っています。砂糖不使用なのになんでこんなに甘くなるんだろう（笑）

●応援カレー

豆腐を一度凍らせて水を切ると豆腐のおいしい繊維だけが残り、肉の代わりになるので、いろいろなお野菜と煮ます。日々余った豆腐を再利用もできる。大雨で被害に遭われた「ガイアガーデン」のトマトは使い切ってしまったのですが、引き続き売り上げの一部を義援金に充てさせていただきます。

●料理が好きです

涼しくなってきたので「豆腐ハンバーグ」「白和え」「おから煮」など昼の惣菜も増やしていきます。金曜夜の営業で試みている「できたてよせ豆腐バイキング」は、薬味が10種類以上あって、おかわり自由。豆腐が「楽しい」につながればいいな。「大豆の春巻き」「豆乳仕立てのレバーペースト」などの小料理に合う日本酒を、にかほ市の「いちじくいち」で出会った「佐藤勘六商店」に選んでいただいています。秋田で豆腐屋が減っていく状況の中、私だけが頑張るんじゃない、仲間たちと一緒に豆腐を守っている気持ちです。それと、編集者と違って、しめきりに追われないのがいいですね（笑）

聞き手：熊谷新子（当館スタッフ）



千秋公園の与次郎稲荷のお膝元でお店を開けることを幸運に感じている。「与次郎」の絵は丹野杏香さん。絹豆腐を使用しひとまわり小さいサイズの「よじろあげ」も考案中。「与次郎伝説」のお話も伝えていきながら、長蛇の列ができるほど多くの人に食べてもらいたいそう。



「よせ豆腐プレート」はご飯の上にお豆腐を。これにツナをかけた「ツナとろろ丼」（期間限定）もある。自家製ツナマヨ（ツナ缶に豆乳、オリーブオイル、米油、塩麹）がトロッとしているのはミキサーで撹拌しているから。豆腐の柔らかさと合う。15年程前から家で食べていたお母さんとの思い出の料理。



「濃厚豆乳ジェラート」は美郷町のジェラート専門店「TiG」と開発。よじろだれと「デュカ」と呼ばれるスパイスナッツをオプションで。試食中スタッフが遊びでかけ始めた。「何やってんの!?」「美味しい！何これ!?」というノリで生まれた絶品。

豆腐百景

イラストレーターの福田利之さんデザインのロゴマーク。【将軍野店】土・日 11:00–18:00。【秋田市文化創造館店】土・日・祝日 11:00–18:00 ※毎週金曜には「できたてよせ豆腐のバイキング」（10種以上の薬味で豆腐食べ放題）や酒、豆腐を使った小料理を出す夜営業も16:00–20:30。

児玉冷菓のババヘラアイス〜目黒さんのそばで

バラ盛りアイスは秋田の夏の風物詩。観測史上最高に暑かったこの夏もずっと、文化創造館に寄り添うように、小さなパラソルの下でアイスを売る人がいました。



目黒さんの所属する児玉冷菓は創業1948年。2色のアイスクリームは創業当時から変わらないシャリシャリ感と素朴な味。

近所にお住まいというおばあさんが花壇の縁に腰掛けてアイスを食べながら目黒さんと話している。「創造館はダンスするのにいいわね」。今年米寿で、旦那さんがなくなって以来30年間社交ダンスを続けてきた。孫の食事を作るのでとおばあさんが去り私はそこへ座る。

片足が不自由なおじいさんは牛島からバスで。「あのね、床屋さんに来たの」。私の隣に座って食べはじめた途端、コーンからアイス部分がボタっと落下。目黒さんは「大丈夫よ〜」とソプラノで歌うようにコーンにもう1つ盛ってあげた。「いいの？」「いいよ〜しょうがないじゃん。落とす人もいるのよ」。地面のアイスに蟻が群がる。おじいさんは、帰るとき「ありがとね」と目黒さんに250円を握らせた。「気持ちだから」。そのおじいさんの隣に座って食べていた20代の男の人は宮崎から。東北を一人旅。

きれいなピンクと黄色のばら。いちごばなな味。「青色のばらもあるのよ」。ソーダレモン味。秋田のプロサッカーチームのブルーのユニフォームに因み、ゲームがある日のソユースタジアムと、それと男鹿のあじさい寺「雲昌寺」では青色のばらを売る。

「18年やっています。週2、3回。主にイベントのある平日や土日に。春のお彼岸（3月20日頃）が初売りで10月いっぱい。私が入った頃は150円（100円の時代もあった）。昨年まで200円で今年から250円。税込み。76歳。お客さんと会話するのが好きで、足腰が丈夫なうちは働きたい」。

30歳前後の男2人、女2人のグループ。幸せそう。東京や名古屋など皆ばらばら。オフ会？　遠距離の恋人同士×2？

「大曲の花火が晴れていれば一年で一番売れます。私のバラ盛りは大きい。包むヘラでおさえると小さくなる、それにまたアイスを足して、形を整えていく。アイスを節約して大きく見せるならヘラでおさないでささっと盛る。花の形は皆違う」。カラスの鳴き声が大きく響いている。「今年は猛暑で食べ物がなくてほおずきまで食べちゃってるんだよ」と目黒さん。60歳くらいの女の人2人と髪が緑色の若いきれいな女性。「初めて食べる味！　さっぱりしていて独特」。

「8人兄弟で私と下の弟ともう2人しか残ってないの。子どもは2人土崎にいます。休みの日に娘と洋服を見にいくのが楽しみで。何歳になっても女を忘れたらだめよ。旦那は私が45歳のときに病気でなくなった。この仕事は私の生きがいです。暑さは我慢するの」。

50代の白髪の混じったショートカットの人のことは私が写真を撮った。明るい人。「食べてみたいと思っていたらここにあった！」。続けて60代の夫婦。30手前のスラッとした女の人。全身黒の服を着た眼鏡の女の人は通りすぎたけど目黒さんが「どうぞ〜」と言ったら戻ってきた。東海林太郎の像の横の椅子に座って食べている。「1つください」とやって来るお客さんのお顔はにこやか。秋田の名物だもんね。

文：熊谷新子（当館スタッフ）
絵：牧野心士（当館スタッフ）

かみこあにプロジェクト2023

上小阿仁村は、秋田県の中でもとりわけ過疎の進む村として知られる。その村で行われる「かみこあにプロジェクト2023」という芸術祭に、いちキュレーターとして参加の声掛けをいただいた。

私が担当する作家の一人は、屋外で大型作品を制作することになった。幸い、村から手伝いに来てくれる人があるという。作家と二人、現場で待ち受けていると、山道を登るエンジン音が聞こえてきた。車から地域おこし協力隊の男性が現れ、挨拶をする。もう一台の車から降りてきたのは、農作業の装いがよく似合う、年配のご婦人だった。近くの村の方が何か用事で来られたのだろうか。作家と顔を見合わせていると、「今日のお手伝いの方です」と男性がご婦人を朗らかに紹介する。我々は狼狽えた。真夏の酷暑が続く日だった。加えて設営は体力仕事である。何となく祖母を彷彿とさせるような農作業姿のご婦人を心配しつつ、作業が始まった。始まってみると、ご婦人はキビキビと実によく働く方だった。なんとこのプロジェクトの初年度である2012年からずっと、ボランティアとして関わってきたのだと言う。色々な作品を見てきたよ、と休憩中に煙草を吹かす様がなんとも格好良かった。

翌日は別の年配のご婦人が手伝いに来られた。我々はもう狼狽えなかった。そのご婦人は、手違いで体力仕事と知らず呼ばれたにもかかわらず、明るく笑って手伝ってくださった。こうした協力の末、作品は予定通りに何とか完成したのだった。

上小阿仁村は、過疎の進む小さな村だ。そしてそこに暮らしながらも、アートという未知を楽しみ、高齢だとしても、力になってくれる人がいる。そう思うと、村のどかな自然が一層明るく浮き立つようだった。

文：中須賀愛美（当館スタッフ）



《Sleeping bear》にしかわしょう子（2023年制作）

「かみこあにプロジェクト2023」
秋田県北部に位置する上小阿仁村が取り組む、現代アート・音楽・伝統芸能の2つの部門を軸とする、里山の魅力を発信するプロジェクト。
作品展示は9月18日で終了したが、10月29日まで食のワークショップや演奏会などが予定されている。

詳細はこちら



大地に寝そべる巨大なクマの骨格部分を、皆で組み立てる様子。農業用資材を用いた。会場へ行き来する際、本物のクマにも2度遭遇した。

デザイン：服部一成　榎本紗織　編集：熊谷新子